

国

語

●満点100点

●時間50分

一 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 白鳥の群れが湖で越冬する。
- (2) 一点差で惜敗し、決勝進出を逃す。
- (3) 港に停泊している帆船を写生する。
- (4) 観光バスに乗って、名所旧跡を巡る。
- (5) 卒業アルバムを見ながら、なつかしい思い出に浸る。

二 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 合唱祭のための実行委員会をモウける。
- (2) 窓にアンマクを引いて、写真会の準備をする。
- (3) 説明の内容をオギナうために図表を提示する。
- (4) 例年にもまして、ザンシヨの厳しい日が続く。
- (5) ヤクソクの時刻に遅れないように早めに家を出る。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついてい

る言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

小学校六年生の「ぼく」(二平)は、夏休みに大学三年生のおじの Kouちゃんとともに、利根川の水源を目指す徒歩の旅に出た。この旅には、同級生の正志、勇太、麻衣、香織の四人も同行した。ゴールを目前にしたこの日、Kouちゃんは足を痛めていたが、水源を見て日暮れまでに山を下りようと、一行は道を急いでいた。

岩を登りきると、そこはまるで別の世界だった。見渡すかぎり、

一面に緑のササがじゆうたんのようにしきつめられている。その緑のじゆうたんの上を、白いガスがゆっくりと流れていく。そしてぼくらの登ってきた道を、滝のようにすべり落ちていった。まるでスローモーションのフィルムをみているように……。

「さあ、もう少しだ。行くぞ。」

道がだんだんだらかになつてきて、頂上が近いことを予感させる。丹後山から、めざす大水上山までは、ゆるやかなのぼりくだけりが続くだけで、ほとんど平らなんだと Kouちゃんが教えてくれた。

山の頂上つて、とんがっているとはかり思つてたのに、ここはまるで原野みたいだ。

「……雨。でも霧雨だわ。」

文字どおり、霧のような細かい雨が風にふわっと流されていた。

静かな世界。海拔二千メートル近いぼくたち六人だけの世界。

「なに？ この音……。」

どこからともなく聞こえてくる「サーツ」というかすかな音。

「お米をこぼしてるみたいな音だな。」

「いやあ、放送の終わったテレビの音みたいだよ。」

正志も勇太も、想像力がたくましい。ぼくには、青い稲の上を風が渡る音に聞こえた。(1)でもちがう、もつと透明な音だ。雲が流れる音？ 新しい空気が生まれる音？ それとも地球の回る音……？

あのおしゃべりの麻衣までが、じつとこの音に耳を傾けていた。

「ササだよ。一面のササ原に、雨が降りそいでひびいている音なんだ。」

Kouちゃんが、小さな声で言った。

こんなにきれいな音がこの世にあったのか……。ぼくらはしばらくのあいだ声もなく、この自然界の音楽に心をうばわれていた。

「あらっ、あれは？」

静かな夢の国に現実がまよいもどった。麻衣の指さす方角をみると、

霧の中にボウツと、一軒の白い小屋のようなものが見える。

「おとぎの家……?」

香織がそうつぶやくのも無理はない。ひっそりとその小屋は建っていた。

「避難小屋だ。* 岩井さんが言っていただろう。あれが丹後山の頂上にある、避難小屋だよ。」

コウちゃんの髪は、霧でびっしりだ。ほくらはその避難小屋にむかってゆっくりと歩いていった。

「ごめんください……。」

勇太がとぼけた声を出して入口を開けたが、中にはだれもいなかった。当然だ。

「ありがたい。ここでちよつと休けいだ。最後のほうは休みの回数をへらしてがんばったから、いくらか時間をとりもどした。十五分間休もう。オレは天水をいただいてくる。」

〈天水〉というのは、天の水、つまり雨水のことだ。山では雨水をためて、貴重な飲み水にするという。「いただいてくる」という言い方がコウちゃんらしくないけど、自然に対しては、それぐらい「謙虚な気持ち」「ありがたいと思う気持ち」をもたなくてはだめだと、コウちゃんはいつも言っている。

トタン屋根は、あいかわらず細かい雨の降り続けていることを教えてくれる。

十五分たった。さあ、最後のひとがんばり、水源にむけて出発だ。水源までは十分か十五分だろう。ところがそのとき、コウちゃんかとんでもないことを言いだした。

「ここからは君たちだけでいっておいで。一本道だ、迷いようがない。オレは足が痛いからもう少し休けいする。なあに、少ししたらあとから追いかけるさ。」

(2) ここまできて、どうして……? だけど、ここで言いあらそっている時間はもうない。

「わかった、ひと足先に行ってる。でも、なるべく早く来てよ。」
そんなに痛かったのか、コウちゃんの足……。

人ひとりがやつと通れるぐらいの道がまっすぐに続いていた。ぼくらの背よりも高いササミたいな植物の中をつらぬいて進む。これはネマガリタケというそうだ。ちりぢりにならないように、おたがいのリュックにつかまって前に進んだ。⁽³⁾ 勇太が、「幼稚園のおでかけみたいだな。」と言ったけど、正志が「ああ。」と答えただけで、ほかに返事をした者はいなかった。

深いネマガリタケの林を、十分ぐらい進んだらうか。ほくらが少し不安になりかけたころ、パツと視界がひらけた。林をぬけたんだ。

「あら、こんなところに石が積んである……。」

香織がしゃがんで、道ばたにある三角形の石の山を見た。

「これ、たしか『ケルン』っていうんだよな。遭難した人の魂をなぐさめるんだって、聞いたことがある。」

よく見ると、その下に小さく『大水上山』と書かれたプレートがうめこんである。

「大水上山……。とうとうきたんだ、水源に。」

ほくがつぶやいたすぐあとに、正志がさげんだ。

「あつた! 石だ、大きな石だ。きつとあれだ、あれがそうだ!」
まっ白な霧の中から、それは現れた。ほくらは疲れていることも忘れてその石にむかって思いきり走った。

「利根川水源……。やった。これが水源の石なんだ。」

その石は、子どもふたりでどうにか手の回るぐらいの大きさで、なだらかな山のような形をしていた。

これを見るために、ぼくは三百キロを自分の足で歩いてきたんだ。
「やったな、一平!」

正志がそう言って、ぼくと*ハイ・タッチを交わした。

「ホント、やったんだよなあ。今のおれたちって、カッコイイよな。」

勇太の似合わないセリフに、みんなが笑った。心から笑いあった。

(4) ぼくはもういちど、だまつたまま水源の石を見た。どっしりと構えたその石は、ただじっと、白い風に吹かれていた。

そのときだった。霧の中から何かの近づいてくる気配がした。

「なに? 何か来るわよ。へんな生き物でもいるのかしら。」

香織がぼくの背中にはりついて、緊張した声を出した。けれどそれは生き物にはちがいがなかったけれど、ぼくらにとってかけがえのない、たよりになる生き物だった。

「コウちゃん! コウちゃんだね!」

コウちゃんは、少し伸びたあごひげから水滴をしたたらせ、ニコニコしながら近づいてきた。

(5) 「やあ、やったな、みんな。ついにたどりついたじゃないか。どうだった? 自分たちだけで、りっぱにゴールした気分は。」

コウちゃんは、みんなに近づいて、ひとりひとりとガッチリ握手した。大きな手だった。

(山口 理「河を歩いた夏」による)
〔注〕 岩井さん——水源の様子について教えてくれた地元の人。

ハイ・タッチ——高く上げた互いの手のひらを合わせる事。

〔問1〕 (1) でもちがう、もつと透明な音だ。雲が流れる音? 新しい空気が生まれる音? それとも地球の回る音……? とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア さまざまな手がかりをもとに、「ぼく」が不思議な音の正体を探り当てていく様子を、順序立てて丹念に表現している。

イ 不思議な音について、「ぼく」がみずみずしい感性で想像を広げていく様子を、問いかけを重ねて用いながら表現している。

ウ 遠くから聞こえてくる不思議な音に、「ぼく」がしだいに心を奪われていく様子を、時間の経過とともに表現している。

エ 不思議な音について、「ぼく」が仲間たちのおっぴな考えをもっと聞き出そうとしている様子を、ユーモラスに表現している。

〔問2〕 (2) ここまできて、どうして……? だけど、ここで言いあらそっている時間はもうない。とあるが、この表現から読み取れる「ぼく」の気持ちを説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 水源まで一本道だとは言うものの、コウちゃんに目的地まで案内してもらえないと知ってたまらなく不安に思っている。

イ コウちゃんらしくない弱気な言葉がすぐには理解できず、一刻も早く説得していっしょに水源へ出発したいと思っている。

ウ ここまでともに歩いてきたコウちゃんの突然の言葉に驚きながらも、何とか自分たちだけで水源に向かおうと思っている。

エ コウちゃんが足を痛めているのはよく分かるが、自分たちと別れてこの場で休んでいることは納得できないと思っている。

〔問3〕 (3) 勇太が、「幼稚園のおでかけみたいだな。」と言ったけど、正志が「ああ。」と答えただけで、ほかに返事をした者はいなかった。とあるが、この表現から読み取れる「ぼくら」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 目的地が間近に迫ったことを知って励まされ、軽い冗談を言い合いながら元氣よく歩いていく様子。

イ 道に迷ったのではないかとという不安をだれもが感じて、慎重な足取りで用心深く進んでいく様子。

ウ 互いの発言を気にかけることもなく、それぞれが林の中を自分のペースで気ままに歩いていく様子。

エ 短いやりとりはあるものの、皆が緊張しながら背の高い植物の中を一团となって進んでいく様子。

〔問4〕 (4) ぼくはもういちど、だまつたまま水源の石を見た。とあるが、この表現から読み取れる「ぼく」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア やつとたどりついた利根川の水源を示す石を改めて見つめ直し、目標を達成した喜びをかみしめている様子。

イ これまで長い道のりを歩いてきた旅の苦勞を思い出し、仲間たちのようには無邪気にはしゃげないでいる様子。

ウ 三百キロもの道を歩いてやつてきた水源ではあったが、石以外には目立つ物もなく少し落胆している様子。

エ 利根川の水源に到達した喜びにわく仲間たちを見て気が緩んでしまい、何となくぼんやりとしている様子。

〔問5〕 (5) やあ、やつたな、みんな。ついにたどりついたじゃないか。どうだった？ 自分たちだけで、りっぱにゴールした気分は。」とあるが、このときあなたが「ぼく」だとして、コウちゃんとの質問に答えるとすれば、どのように答えるか。コウちゃんに気持ちを理解してもらえようように内容や表現を工夫して、あなたの話す言葉を三十五字以上五十字以内で書け。なお、や・や。などもそれぞれ字数に数えよ。

〔四〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついてい
る言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

かつて私たちの祖先は、自然の美しさに目を奪われ、自然を模倣しながら装飾することの愉しさを知り、絵画や彫刻によって創造の喜びを知ったのである。現在の抽象絵画や現代造形の原点も、とどのつまりは自然の美にあるという創造の基本理念を、忘却してしまつたのではないだろうか。自然と人間の関係が薄れた理由は、私た

ちが自然と接する機会が少なくなり、自然のすばらしさや美しさを実感することさえ忘れてしまったということが挙げられる。(第一
段)

現代社会では、コンピュータや映像＊メディアが氾濫し、人々は自然との直接体験よりも、プリント・メディアや映像メディアを通じた二次元的な情報選択との接点が圧倒的に多くなり、また、こうした情報収集で満足してしまうのである。さらにテレビゲーム、コンピュータ・グラフィックス、インターネットの映像情報が、現実との境界を曖昧にしてしまった映像の＊バーチャル化が、人々に自然を受け入れる余裕さえ、見失わせてしまったのである。自然の美しさにこたえる感性さえも合わせていない現代人に、美しい形が作れるはずもなく、形の美しさを語る資格もないのではないだろうか。(第二段)

そのような現代人でも旅に出て偶然自然の美しさに気づくことがある。(1) 悲しいかな、その美しさはテレビやメディアで見る自然と二重写しとなつて、やはり自然の美しさは複製にすぎないと悟るのである。そこには実体験した感性も、強力なデジタル万能の映像メディアに吸引され、同化されてしまうのである。(第三段)

科学が発達していなかった工業化以前の社会では、道具や生活用品はすべて手づくり生産であり、デザインという概念はもちあわせていなかった。道具や器の形は必然的に使いやすく、使用目的に合致したものでなければならず、結果的に長い時間をかけて少しずつ無駄のない形に改良されていった。これは機能を追求した形となり、結果的にどれも美しいのである。(第四段)

これはまさしく風化した岩石が川に流れ、下流にいくにしたがい小さくなり、角がとれて滑らかな形となるプロセスと同じである。こうして生々流転を繰り返しながら、絶えず移り変わる大自然の法則によって、万物の形が形成されていくのである。自然を支配する

見えない秩序の法則が、それぞれの形を美しく作り上げるように、もつと人間は謙虚になってこの自然界の*造化の原理を、ここで再び見直すべきではないだろうか。(第五段)

つまり自然が作り出す形が美しいのは、自然の法則に逆らわず、気の遠くなるような長い時間的な経緯を経て、少しずつ改良されていく機能を満たした形であり、結果的に無駄のない形となるから、ということが出来る。(2)それゆえ、私たちはもつと自然の存在を真摯に受け止め、かつて先人たちが自然を美の発想の原点としたように、自然が作り出した形や色*テクスチャから形の美を探るべきであろう。(第六段)

原始時代の人々は自然の中から美しい形、美しい模様を探し出し、装飾することを覚えた。かつて美術史家のG・ゼンペルは、幾何学的様式の始原の形を小枝の樹皮を編み物とすることや、草の茎や植物繊維による織物の技術から発生したパターンに認めることが出来る^{と指摘している}。つまり人間が衣服をまとうようになって、織物の技術が発展したが、はじめは樹皮や植物の茎などを編み織物に仕上げた。この過程で格子やジグザグのパターンが偶然生まれ、これが幾何学的紋様を形成する要因となったとする説である。種々の色の茎を意識的に選び、これをリズムカルに変化させることによって偶然、ある種のパターンができ上がり、これが装飾模様^{に発展していった}。また単純な三角形のジグザグの繰り返し^{の山形紋や縞模様}は、こうしてでき上がったのだろう。またそこに鳥の羽根に見られるような紋様を発見し、人間は創造の喜びを知った。自然の中に美しい形や色をただ見て楽しんでいくだけでなく、自分たちで、美しい幾何学的模様を自由に作り出す喜びを知った結果、人間の自立心を喚起し、しだいに自然と互角の立場をとろうとする対抗心がわき上がってきたのである。つまり私たち人間は、自然の造形を*モチーフとして紋様化し、装飾美術を作り上げ、世界各地でそれぞれの

時代の様式美を作り上げてきたといえる。(第七段)

二十世紀に入って、人々は自然とともに歩んできた、こうした人間の歴史の歩みを突然忘却してしまったかのような振る舞いをし続けてきた。(第八段)

幸い、最近、単に複雑な形、でたらめな形といわれてきた自然界の非定形の形に、ある秩序があり、それが*黄金比とも密接な関係があることが明らかとなり、改めて、自然の形のもつ美しさを再認識したのである。ここで私たちはアートやデザインなどの造形活動ばかりでなく、日常生活における、美しい形に対する感性を磨く上で、自然は人類共通の師であることを教えられたのである。(第九段)

(3) 私たち人間は襟を正して、自然に畏敬の念をはらうべきである。自然の形の復権は次世代の人類共通のキーワードともいえよう。(第十段)

(三井秀樹「形の美とは何か」による)

〔注〕メディア——情報を伝える手段。

バーチャル化——その場がないものをあたかもあるかのように見せかけること。

造化——ものを作り出すこと。

テクスチャ——材質感。

モチーフ——題材。

黄金比——だれもが美しさを感じるとされる長さの比率。

〔問1〕(1) 悲しいかな、その美しさはテレビやメディアで見る自然と二重写しとなって、やはり自然の美しさは複製にすぎないと悟るのである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 現代社会では自然を直接体験する場が少ないため、人々は自然と触れ合おうとせず、映像の中の美で満足してしまっているということ。

イ 本当に美しい自然と出会う機会の少ない現代人ではあるが、映像で表現された美が本物でないことには皆が気づいているということ。

ウ 現代人は自然の美にせっかく気づいても、それが映像化された自然の美と同じようだと思ってしまう、感動しなくなっているということ。

エ テレビやメディアの発達した現代では、映像による自然の美を求めることこそ大事であると人々が確信してしまっているということ。

〔問2〕 (2) それゆえ、私たちはもつと自然の存在を真摯しんしに受け止め、かつて先人たちが自然を美の発想の原点としたように、自然が作り出した形や色・*テクスチャから形の美を探るべきであろう。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 工業化以前の社会で先人たちが自然の美から学んでデザインした道具や器には、現代人には作り出せない美しさがあると考えたから。

イ 自然が作り出す形には長い時間をかけて作り上げられた機能的で無駄のない美しさがあることを、現代人は忘れていていると考えたから。

ウ 現代の発達した科学の成果を用いれば、人々が自然の美しさを超える独自の美を作り出すのはそれほど困難なことではないと考えたから。

エ 現代の人工的な美には応用できないが、自然界には人間がとても模倣できないような美しい形や色が隠されていると考えたから。

〔問3〕 この文章の構成における第八段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでの段落で述べてきた自然に対する現代人の思いをまとめ、具体的に実例を示して文章全体の内容を理解しやすくしている。

イ 第七段で述べた原始時代からの人々と自然とのかかわりを踏まえ、改めて現代の状況に視点を当ててこの文章全体の結論に導いている。

ウ 第九段以降で述べているこの文章全体の結論に対し、逆の立場で現代人の自然観を肯定する意見を紹介して論点を整理し直している。

エ 文章全体を通して述べている人間と自然とのかかわりについて、原始時代の人々の生活を説明して問題の所在を明らかにしている。

〔問4〕 (3) 私たちは襟えりを正して、自然に畏敬いけいの念をはらうべきである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 現代人が自然を師とする際には、自然は場合によっては人間を苦しめるほどの力を秘めていることに注意する必要があるということ。

イ 現代人が創造の喜びを知るためには、科学的な文明はすべて否定し、自然の秩序や法則に従って生きることが不可欠であるということ。

ウ 自然を敬い再認識することは大切であるが、美に対する私たちの感性までもが影響を受けないようにしなければならぬということ。

エ 私たちは、美しい形を作り出す秩序や法則をもつ自然に対し、これまでの振る舞いを改めて謙虚に心を向ける必要があるということ。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、自分自身の体験をもと

に、「自然から学ぶ」というテーマで短いスピーチを行うこととする。

① あなたの考えが相手に的確に伝わるように構成を工夫して簡条書きのメモを作れ。

② そのメモをもとに、あなたの話す言葉を二百字以内にまとめ、それだけ字数に数えよ。

五

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

石川 杜甫は李白より十一歳下です。李白が宮廷詩人をしくじったのちに交流が始まっていますが、当時の社会的な地位は李白のほうが上です。李白は杜甫の影響を受けていませんが、杜甫は李白の影響を受けています。

陳 天宝三年（七四四）、*長安から追放された李白が山東に向かう途中、洛陽を通りかかり、ここで杜甫と出会うわけです。杜甫は李白を一目見て心酔し、李白のあとを追って梁、齊に*遊ぶことになる。一年半ほど旅行して別れてからも、杜甫は「李白を夢む」という二首連作の詩をつくっています。これは李白が流されたとの情報を耳にしたときつくったもので、杜甫の李白への思いは相当熱かったようです。

石川 杜甫の文学の原動力に李白はなっていますね。ただ、詩風は違っている。杜甫はかなりの自信家ですから、俺が一番の詩人だと思っていたでしょうし、李白だってそう思っていたはずですよ。

(1) つまり、杜甫としては李白のいいところはどんどん取り入れるけれども、詩人としては俺のほうが上だと自覚している。杜甫の詩はなかなか難しいですし、料理で言うならば非常に凝った料理ということになります。ところが李白のほうは、お茶漬けさらさら

らというような側面がある。

陳 杜甫の詩では、*安禄山の乱の直後の、揺れ動く心を詠んだ詩がいいですね。

石川 同感です。彼が久しぶりに羌村の家族のもとに帰ったときにつくった三部作「羌村」は感激します。劇的な再会の様子が実にリアルな描写で詠まれています。そこにいるのが信じられないという妻子の驚き、そしてあふれる涙、近隣の人たちは塙の外でもらい泣きです。*幽閉中、月を見ながら夢想していたのが、今、現実となっている。(2) *相對すれば夢寐の如しの句は万感の思いを伝えますね。

陳 杜甫の詩はどちらかと言えば深刻です。詩の一つの効用として、人の気持ちを高ぶらせるという面がありますけど、この面では李白のほうが適している。

石川 杜甫の場合、きちっとした律詩と長編の*古詩を得意としていた。李白が*楽府体の歌行を得意としたのとは対照的です。*「李絶杜律」（李白は絶句、杜甫は律詩）という言い方があるくらいです。

陳 杜甫は推敲のあとがかなりうかがえますが、李白はそれがあまり感じられない。

(3) 石川 李白は律詩もあるんですが軽いです。杜甫の律詩はズシッと重い。日本人には同じくらしいの人氣がありますが、*素人受けは李白のほうがあるのではないのでしょうか。とっつきやすいというか、馴染みやすいのが李白ですね。

陳 李白は読んでいてたいへん調子に乗れる。*文化大革命のときのような、皆がワーツと燃え上がるような時期には李白が好まれたようです。

石川 李白には即興的な絶句で優れたものがたくさんありますが、これは鑑賞しやすいし、覚えやすい。

陳 李白だと、酒を飲むときの詩がいいですね。

兩人 対 酌 山 花 開

一杯 一杯 復 一杯

我 醉 欲 眠 卿 且 去

明 朝 有 意 抱 琴 來

兩人 * 対 酌 して 山 花 開 く

一杯 一杯 復 した 一杯

我 酔 っ て 眠 ら ん と 欲 す 卿 且 く 去 れ

明 朝 意 有 ら ば 琴 を 抱 い て 来 た れ

(4) 眠たいからお前、もう帰れ、と言いながらも、明日の朝、また気が向いたら琴を抱えて来ておくれ、と言う。なんでもないような詩ですが、李白の気分が目の前に見えてくるような、自然な詩ですね。(5) 重たい詩ではけつしてないが、こちらにスーツと情景が浮かんでくるところは、さすが李白です。

石川 李白が使った後半の二句は、陶淵明の故事に基づいているんですね。

陳 そうです。眠たくなったから帰れ、というところと、また明朝気が向いたら来いよ、というところは陶淵明の伝記から取っているんですが、こういうところも李白の持ち味です。自由な、とらわれない精神の持ち主だったという証拠でしょう。

(石川忠久、陳舜臣ほか「漢詩」の心)による)

[注] 長安——唐の都。

遊ぶ——旅行して風物を楽しんだり詩を作ったりすること。

安祿山の乱——唐の時代の武将である安祿山が拳兵した乱。

幽閉——人を部屋や建物などに閉じ込めること。

相對すれば夢寐の如し——向かいあっていると、まるで夢をみ

ているかのようだ。

古詩、樂府体の歌行——ともに中国の古い詩の一種。

文化大革命——一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、中国で広がった政治的な運動。

対酌——向かいあって酒をくみ交わすこと。

陶淵明——中国の詩人。

[問1]

(1) つまり、杜甫としては李白のいいところはどんどん取り入れるけれども、詩人としては俺のほうが上だと自覚している。とあるが、この文における「けれども」と同じ意味・用法で「けれども」を用いて、二十字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や・などもそれぞれ字数に数えよ。

[問2]

(2) * 相對すれば夢寐の如し」の句は万感の思いを伝えますね。とあるが、ここでいう「万感の思い」について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 戦乱のために理不尽にも捕らえられて幽閉されたことを、ほかのことは何も考えられないほどに強くいきどおる感情。

イ 妻子と再会した今のこの幸せなときが夢のように消えて、再び幽閉されてしまうのではないかとひどく不安に思う感情。

ウ 幽閉中の望みが現実となった大きな喜びとともに、これまでの苦しみや悲しみなどのさまざまな思いが込められた感情。

エ つらく苦しい幽閉中ではあるものの、ようやく家に戻れることに決まり涙があふれるほどにうれしさがこみ上げる感情。

[問3]

(3) 石川の発言のこの対談における役割について説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 李白の詩の親しみやすさを述べることで、二人の詩人を比較してきた対談の内容を李白の話題へと焦点化させるきっかけを作っている。

イ 杜甫の詩の重々しさを述べることで、李白の話題を主に取り上げてきた対談の内容を杜甫の話題が中心となるように転換させている。

ウ 日本人の詩の好みについて述べることで、それまで個々の詩人についての話題が多かった対談の内容を漢詩全体へと話題を広げている。

エ 李白と杜甫の律詩の特徴を述べることで、詩人の人柄や生き方が中心であった対談の内容を二人の詩の鑑賞の話題へ変化させている。

〔問4〕 (4) 眠たいからお前、もう帰れ、と言いながらも、明日の朝、また気が向いたら琴を抱えて来ておくれ、と言う。とあるが、ここでいう「気が向いたら」に相当する箇所を、本文中の漢詩の書き下し文の中からそのまま抜き出して書け。

〔問5〕 (5) 重たい詩ではけつしてないが、こちらにスーッと情景が浮かんでくるところは、さすが李白です。とあるが、李白のこの詩について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 山中の花を眺める二人の人物の心情をこまやかに描くことで、友人を思いやる気持ちの大切さを教えてくれる詩である。

イ 友人との楽しいひとときを過ごした後では、かえってものさびしく感じられる山中の情景を印象的に表現している詩である。

ウ 少しも変わらない自然と対比して、気まぐれな人間の心の頼りなさや世の中の移り変わりの激しさを強調している詩である。

エ さりげない自然描写や語の繰り返しを用いながら、その場の自由でのびのびとした雰囲気十分に伝わってくる詩である。

平成16年度

解答用紙

国

語

(注) この解答用紙は編纂上の都合により、
 実物を約65%に縮小してあります。
 153%の拡大コピーによりほぼ原寸大で
 使用することができます。

| | | | | | |
|---|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 | (1) 越 冬 | (2) 惜 敗 | (3) 停 泊 | (4) 巡 る | (5) 還 る |
| | | | | | |

| | | | | | |
|---|----------|----------|----------|----------|----------|
| 2 | (1) モウける | (2) アンマク | (3) オキナウ | (4) ザンシヨ | (5) ヤクソク |
| | ける | | う | | |

| | | | | | |
|---|------|------|------|------|--|
| 3 | (問1) | (問2) | (問3) | (問4) | |
| | (問5) | | | | |

| | | | | | |
|---|------|-------------------|------|------|--|
| 4 | (問1) | (問2) | (問3) | (問4) | |
| | (問5) | ① 國家書寫の × モ | | | |
| | | ② | | | |

| | | | | | |
|---|------|------|------|------|--|
| 5 | (問1) | | | | |
| | (問2) | (問3) | (問4) | (問5) | |

新 聞

| 1 (計10点) | | | | | 2 (計10点) | | | | | 3 (計25点) | | | | | 4 (計30点) | | | | | 5 (計25点) | | | | |
|----------|-----|-----|-----|-----|----------|-----|-----|-----|-----|----------|----|----|----|----|----------|----|----|----|-----|----------|----|----|----|----|
| (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 |
| 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 2点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 10点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 | 5点 |

解答

- 一 (1) えっとう (2) せきはい
(3) ていはく (4) めぐ (5) ひた
- 二 (1) 設 (2) 暗幕 (3) 補 (4) 残暑
(5) 約束
- 三 [問1] イ [問2] ウ
[問3] エ [問4] ア
[問5] (省略)
- 四 [問1] ウ [問2] イ
[問3] イ [問4] エ
[問5] ① (省略) ② (省略)
- 五 [問1] (例)天気予報では、明日は晴れるけれども、夕方一時雨が降るそうだ。(30字)
[問2] ウ [問3] ア
[問4] 意有らば [問5] エ

一 [漢字の読み]

- (1)冬を越すこと。 (2)あと少しのところであけてしまうこと。 (3)船がいかりをおろして止まること。 (4)音読みは「巡回」の「ジュン」。 (5)音読みは「浸水」の「シン」。

二 [漢字の書き取り]

- (1)音読みは「設立」の「セツ」。 (2)映画を映すときなど、部屋を暗くするために引く黒い幕。
(3)音読みは「補欠」の「ホ」。 (4)立秋以後も続く暑さのこと。 (5)「束」の訓読みは「たば(ねる)」。

三 [小説の読解] 出典；山口理『河を歩いた夏』

[問1] <表現の理解>まるで「自然界の音楽」のような「サーッ」というかすかな音を、「ぼく」は「雲が流れる音」なのか、「新しい空気が生まれる音」なのか、それとも「地球の回る音」なのか、音の正体をいろいろ想像しながらじっと耳を傾けている。

[問2] <心情の理解>あと十分か十五分歩けば、目的の水源にたどり着くというところで、コウちゃんは足が痛いので、自分たちだけで先に行くようにと言う。みんなをひっぱって来てくれたコウちゃんが、肝心のゴールと一緒に立てないことに、「ぼく」はわりきれない思いでいる。しかし、時間はあまりなく、とにかく先を急がなければと、自分たちだけで先に出発することを決意した。

[問3] <文章内容の理解>背丈よりも高いネマ

ガリタケが生い茂っているの、前を進む人の姿を見失わないようにするため、「ぼく」たちは、お互いのリュックにつかまった。頼りにしてきたコウちゃんはおらず、「ぼく」たちは少し不安を感じているが、水源までの最後の道をみんなですっきりと歩いて行こうとしている。

〔問4〕〈文章内容の理解〉何日もかけて三百キロも歩き、ついに目指す利根川の水源にたどり着いた。「ぼく」は、水源を示す石を改めて見つめ、自分の足で目標を達成できたことに、深い満足感を覚え、喜びをかみしめている。

〔問5〕〈作文〉目標を達成できた喜びと、コウちゃんへの感謝の気持ちが伝わるように書く。

四〔論説文の読解—自然科学的分野—自然〕出典；三井秀樹『形の美とは何か』。

〈本文の概要〉自然と接する機会の少なくなった現代人は、自然のすばらしさや美しさを感じる感性に乏しくなった。工業化以前の社会で手作りされていた道具は、機能的でむだがなく、しかも美しいが、これは自然が長い時間をかけて造り出してきた美しさに等しい。私たち人間は、自然に対してもっと謙虚になり、自然が生み出す形や色の美しさ、自然界の造化の原理を再び見直す必要がある。

〔問1〕〈文章内容の理解〉現代人は、自然と接する機会が少なくなり、コンピュータや映像メディアを通じた間接的な形で触れることで、満足するようになった。その結果、たまたま美しい自然に気付いても、テレビやメディアで見た自然の映像の方が、先に浮かんできてしまい、目の前にある自然そのものの美しさに対して、感動することができないのである。

〔問2〕〈文章内容の理解〉工業化以前の社会では、人々は自然の機能的でむだのない美しさを、道具を作るときの原理とした。自然の形が美しいのは、自然界を支配する法則に逆らうことなく、長い時間をかけて少しずつ改良され、機能にあったむだのない形になるからである。

〔問3〕〈段落関係の把握〉原始時代の人々は、自然界の美しい形や模様を探し出すことで、織物や紋様や様式を作り出してきたが、創造する喜びを知った結果、しだいに自然と互角の立場をとろうとするようになった(第七段落)。そして、二十世紀になって、人々は自然とともに歩んできた歴史を忘れ、自然を軽んじるようになった(第八段落)。最近、自然の形のもつ美しさが再認識されるようになった(第九段落)。私た

ちは、自然の形の美しさにもう一度、目を向けるべきである(第十段落)。

〔問4〕〈文章内容の理解〉現代人は、自然とともに歩んできた人間の歴史を忘れ、自然をないがしろにし、その美しさやすばらしさに対して鈍感になってしまった。自然は、万物を美しい形に形成していく目に見えない秩序の法則をもっている。私たちは、自然に対してもっと謙虚になり、人類の師として敬うべきである。

〔問5〕〈作文〉自然と触れ合って自分が感じたこと、得たものなどを、具体的な体験の例として書くと、説得力のある文章になるだろう。

五〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典；石川忠久、陳舜臣ほか『『漢詩』の心』。

〈現代語訳〉二人で向かい合って酒を酌み交わしている。座っている山中には、花が咲き乱れている。／一杯、また一杯、そしてもう一杯と、次々に杯を重ねる。／私は酔っていい気持ちになり、眠たくなってきた。君よ、この辺でしばらく帰ってくれないか。／そして明日の朝、また気が向いたら琴を抱えて来ておくれ。

〔問1〕〈表現の理解〉「けれども」は、逆接を表す。

〔問2〕〈文章内容の理解〉「万感の思い」とは、心に起こるさまざまな思い。戦乱のために家族と離れ離れになり、幽閉された杜甫は、月を見ては家族のことを思い出した。もう会えないと思っていた家族に、今やっと再会でき、夢ではないかと思うほどのうれしさと、これまでの生活の苦しみや悲しみなど、さまざまな思いが湧きあがり、涙でいっぱいになっているのである。

〔問3〕〈文章内容の理解〉李白の律詩は、杜甫に比べて「軽い」感じがあり、そのぶん素人にはとっつきやすくなじみやすい。

〔問4〕〈漢詩の内容理解〉「明日の朝、また気が向いたら琴を抱えて来ておくれ」は、「明朝意有らば 琴を抱いて来たれ」に当たる。

〔問5〕〈漢詩の内容理解〉山の中で友人と二人、酒を酌み交わし、何杯も杯を重ねていく様子が、「一杯」という語句の繰り返しで想像できる。いつの間にか、酔っていい気分になり、ごろりと横になって眠ろうとする。「眠くなったから帰れ」「また明朝気が向いたら来いよ」と言うところからは、いかにも「自由な、とらわれない」李白の気持ちが伝わってくる。